京都新聞（夕刊）　2009年（平成21年）5月11日　月曜日

現代のことば

山田（やまだ）　奨治（しょうじ）

潮干狩りと〈学び〉

潮干狩りに行ったときのこと。三歳くらいの男の子を連れた、両親と祖父母が、潮の来ない、乾いた安全な砂浜に、貝を埋めていた。

埋めおわると、大人たちは男の子に〈おいでおいで〉をして、「さあ、○○ちゃん、ここだよ。ここを掘ってごらん」という。男の子がいわれた場所を掘ると、貝がゴロゴロ出てくる。大喜びする子の姿をみて、親も祖父母も、顔をほころばせていた。

よくあるような、微笑（ほほえ）ましい家族のふれあいだといえば、それまでだけど、わたしには、その光景が、とても気になってしまった。いまの教育の、縮図のように思えたからだ。

貝を探し出すとは、〈学び〉のこと。ひとは、広大な浜辺に立って、潮の流れや満ち引きを、肌で感じながら、自分の感覚を頼りに、貝を探すのがいい。

どこに貝がいるか、わからない。親が用意してくれるものでは、さらさらない。そもそも、貝とはどんな姿なのか、どんな種類があるのか、食べられるのか、どんな味がするのかも、わからない。まわりをみれば、自分とおなじように、貝を探しているひとが、たくさんいる。

そんななかで、自分の貝をみつけてこそ価値がある。たとえみつけられなくても、浜辺で冷たい水に足をつけて、潮のしぶきを顔に浴びて、そのしょっぱさを感じ、あるいは何か得体（えたい）の知れない生き物を、みつけることができたら、それだけでも値打ちがある。

安全な場所に貝を埋めておくとは、ある手順さえふめば、〈答え〉に行き着けるように、しておくことだ。子どもは、教えられたことにしたがえば、〈答え〉にたどり着いて、合格点をもらえる。教える側は、それで教育の目的が達成されたと、教わる側は、〈答え〉は案外かんたんなところにあるんだと、錯覚する。潮の来ない、乾いた安全な場所には、貝などいないことに、気づかないまま。

みつかるあてのない貝を探す旅に、ひとをいざなうことが教育の、とくに大学教育の使命だと、わたしは信じている。大学の教壇に立つときに、授業のはじめにこういう。「大学で学ぶことに、正解はない。問題を解くことよりも、自分が考える問題を、みつけ出すことのほうが大事なんだ」

新入生にこれをいうと、だいたいの学生は、きょとんとしている。無理もない。与えられた問題への、唯一の正解を出すこと、あらかじめ埋められた貝を、探すことばかりしてきたひとには、なかなか理解できない要求だろう。

最近の大学は、授業計画を綿密に作り、そのとおりに授業しろと教員に要求する。これなども、貝を埋めておくことに近い。計画どおりに進まないと、授業評価のときマイナスになる。そのときどきの学生に合わせて、授業内容を修正することもままならない。これでは、みつかるあてのない貝を探すような、ほんとうの〈学び〉に、ひとをいざなうことはできない。

わたしは、ちょっと考えすぎなんだろうか？

（国際日本文化研究センター准教授・情報学）